キャラクター名
狼坂　葬（おいさか あおい）

プレイヤー名

メインクラス	シーフ	**Lv.1:**		**レベル**	3
サポートクラス	ガンスリンガー	**Lv.1:**	ガンスリンガー	**性別**	女
称号クラス				**年齢**	17
種族	ヴァーナ			**境遇**	裏切り
出自（効果）	騎士			**目標**	名誉

	筋力	器用	敏捷	知力	感知	精神	幸運
基本値	11	13	13	6	10	6	9
ボーナス	3	4	4	2	3	2	3
クラス修正	0	2	1	0	2	1	0
他修正							
能力値	3	6	5	2	5	3	3

HP	47
MP	38
フェイト	5

装備品		射程	命中	攻撃	回避	物防	魔防	行動	移動
右手	ガンパード	10m	0	15	0	0	0	0	0
左手									
頭部	ドミノ					2			
胴部	レザーアーマー					5			-1
補助	ファインバックラー					4			-1
装身具									
能力値			6	0	5	0	3	10	8
スキル								1	5
その他									
総計(右)			6	15	5	11	3	11	11
総計(左)									
総計(両)									m
ダイス数			2 d	2 d	2 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	5			5	+ 2 d
トラップ解除	6			6	+ 2 d
危険感知	5			5	+ 2 d
エネミー識別	2			2	+ 2 d
アイテム鑑定	2			2	+ 2 d
魔術判定	2			2	+ d
呪歌判定					+ d
錬金術判定					+ d

所持品	
冒険者セット	
HPポーション	
MPポーション	
MPポーション	
毒消し	
筆記用具	

現在重量： 10		
最大重量： 22	所持金： 425	預金・借金：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
オーバーパス	★	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果： 狼族、移動力+5m、行動値に+1								
ワイドアタック	1	4	メジャー	武器	範囲(選択)	命中	5	
効果： 命中の達成値に+SL								
スペシャライズ	2	-	パシッヴ	-	自身	-	5	
効果： 命中の達成、攻撃に+SL								
ピアシングストライク	1	5	DR直前	-	自身	自動成功	3	
効果： ダメージ（攻撃）+(SL)D								
ドッジムーブ	1	2	リアクション	-	自身	回避判定	5	
効果： 回避の達成値+(SL+２)								
バタフライダンス	1	-	パッシヴ	-	自身	-	1	
効果： 回避判定に+１D								
キャリバー	1	-	アイテム	-	-	-	1	
効果： 攻撃力はCL+3								
ガンパード	3	-	アイテム	-	効果参照	-	5	
効果： 攻撃力に+SL*3、重：6・部位：双								
アームズマスタリー：魔導銃	1	-	パッシヴ	-	自身	-	1	
効果： 命中判定に+1D								
	1							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

【Personal Date(詳細)】
人間でいうと２４歳くらい・身長はかなり高め・ひょろい・ぼさぼさのボブ（前髪なし）・目力は強い・ふらふらしている・父の刀の鍔がお守り

【History】
　私の父は昔騎士だった。遠い遠いとこにある、サムライの国で。そこで偉い人を守っていた。
サムライってどんなんだか知ってる？　すごくかっこいいんだ。こう、刀をサッと抜いて、かと思えばもう敵をやっつけてしまう。
そんな背中に憧れて、私も早くから刀を握っていた。いつかは私も父と同じように、誰かを守るために。

　しかし、幸せな時間なんて長くは続かない。そんなの小説の中の話だと思っていたけど、現実でもそうらしい。
それは１０年前のこと。その護衛していた偉い人が殺されてしまった。守っていた父も一緒にね。それは父の一番ライバルであり、友だった人がやったことだった。
その人はいつも「もう刀の時代は終わった。これからは銃がこの世界を支配するんだ」と言っていたことを覚えている。父はそれを聞いて、「そんなのはわかってる。でも、変わるわけにはいかないんだ」って返してたのも。
たぶん、父は負けることがわかった上で必死で偉い人を守ろうとしたんだ。だけど、やはり銃には勝てなかった。それだけのことだ。

　その一件があってから、私と母は逃げるように国を去った。今回のことは全部父が企てた陰謀にされる、早く逃げろ、とまだ夜も明けきらないうちに家に駆け込んできた者がいたから。父を殺した奴なのに、私たちを助けようとするなんて、本当にずるい。素直に憎めないではないか。
そして別れる際に、私は父の刀の鍔と一丁の銃をもらった。本当はこれをお父さんにあげるつもりだったらしい。いつか剣を捨てて一緒に歩き始めるその日のために。

　そのときから、私は刀を捨てた。別に父がばかだと言ってるわけではない。父の死は無駄死にではないとわかっている。刀は刀で素晴らしい。しかし、それでは、守れないものもあるから私は銃をとった。もう大切なものを失いたくないから。